

# 現代社会と個人の欲望（第一報）

（人間関係よりみた衣・食・住に対する一考察）

精 園 俊 介

## おしつけられた欲望

人間はそれぞれ多種多様の欲望をもつ。その欲望を追求し、みたそうとつとめる。追求しこれが満たされた場合、われわれは満足感をもつ。楽しい幸福にひたることができる。この欲望を追って満足をえようとする行為の連続が人間の生活である。

ただ人によってちがうところは、その欲望が、己れ個人だけの利己的欲望であるか、乃至はその欲望が、単に自分ひとりの満足にとどまらず地域社会の欲望に通じ或はまた国家全体に通じさらに世界人類の欲望にまで拡大したのか、単に欲望といっても人により欲望の内容には大きな相違がある。

後者の場合——即ち自分の求めるものが自分だけの、ためをはかる欲望でなくその欲望が世界人類の求めるものである場合——それは「神の願い」であり「仏の心」であって、キリスト釈尊など偉大な人格者の欲望はこういうものといえる。

人間生活の理想は自分らの欲望を、より高く、より清くより正しい全人格者の欲望にまで拡大、発展することにあるのはいうまでもない。

しかしここに今とりあげる問題は欲望の広さとか高さをいうのではない、その以前の過程の問題である。お互いのもつ欲望の、追求充足の過程において、もっと自主性をもって発意、選択、創意、工夫があってよいという点について私見を述べたい。

○

欲望は元来足らぬを補ない、みたしたいという欲求から起る。その欲求を充たすには(1)欲望をみたそうと願う思惟がおこり、(2)この思惟、願望をどうして、どういう手段方法で、みたくか——数ある手段方法のうちのどれを採るか——を選択して(3)そのうえで、その選択した手段を行動にうつす——すなわち実行との、少なくとも3段階をへねばならぬ。

この3段階をへてようやく欲望は満足される。しかもこの段階で、どんな方法で欲望をみたくかという選択の場合でも、またどんな行為で実行するかの場合でも、いずれも個人の趣好で方法は異なり、またそれぞれ独自の工夫や創意が払われねばならない。かくしてその欲望が満たされて、われわれは幸福を感じるのである。

すなわち幸福は他から与えられるものでなく、自らの創意工夫努力によって、自主的に思惟し、選択し、実行して自分が生み出すものである。

しかるに現代社会は欲していない慾望を据膳で食わせてくれる。求めてもいない幸福を、これが幸福だから享けよと強いるかに見える。

慾望より先に満足を、欲求より先に結果的幸福を与えられる。食べたいと思わぬものを食べといわれても欲しくないように、慾望の思惟のないものに、天降りに与えられることは無理を強いるに等しく、満足感も幸福もないのみか本人にはかえって迷惑になるばかりである。

こんなことがわれわれの生活のあらゆる面に見られる、「幸福」過剰の社会世相である。

## ○

戦後の「日本憲法」は世界人類の慾求である平和を願う規制として、世界類例のない高い理想を掲げたものと高く評価されているものである。しかるに国民は一向に喜ばず、むしろ押しつけられた憲法だとか、その内容が現実と多分に格差があるとか、批判の俎上にさらされ、現に憲法調査会を設けて審議し、一部にはこれを改正する意図すらおきている。

多くの国の例にあるように憲法が生れるまでには、幾多の血の犠牲が払われ、国民の熱願によって勝ちとられたものであるのに、日本は全く事情が違っている。戦後の疲弊から国民は食うことが精一杯で南瓜芋蔓を食って僅かに飢餓をしのぎ、生きることの外を省みる余裕はなかった。こんな時に——国の制度の基本となる憲法など全然考えもせず求めもせず、憲法を思考する余裕のない時代に——一部上層部で米軍との間の了解でつくったのが日本の憲法である。だからこれは慾望を充足したという満足感もない、幸福とも思わないのも当然である。

## ○

憲法でもそうだからと、一口にいつてしまえばそれまでだが、その後日本は経済の高度成長をとげ、外観は国民の生活水準はあがったといえよう。しかし内面的にはほしいとき、ほしいものが与えず、ほしくないものを食わされ、国が保有する手持ちの物資を分配されて、それで我慢させられる仕組である。いわゆる個人の慾望を充たす生活というより、社会の経済機構の、消費部門を滑らかに回転するための手段として生活させられているかの現実である。

## 食生活の今昔

まず食生活からみる。昔は季節のものを賞美した。江戸っ子はそのはしりを口にするを楽しみ「目には青葉、山にほととぎす初鯉」と初鯉をば初夏の何よりの趣好とし、威勢のいい呼声を聞けば、とび出して買いたくなったものだ。味はやはり季節のものを季節に食うのがうまいそれが社会の上層にある人ならともかく、裏長屋の熊公、八公が女房を質に入れても初鯉を試食したという、当時の庶民の味覚に対する意気を取りあげたい。

それがこの頃は、どんなものでも、どんな時期にも、間に合う缶詰ができて、肉、魚、野菜あらゆるものが、缶詰で手にはいるようになった。簡単で便利である。お蔭で食卓は手間ひまのかからぬ即席料理が愛用される。しかし工夫がなく特色がなく画一的で妙味はない。人間は食生活から季節の変化を喪失した。

主婦は趣向をこらして必要な資材を需める労力をはぶいて缶詰を切って食卓を取りつくろうことになった。家政の合理化には役立って、一進歩とはいえる。だが個人の慾望には大きな規制をうけている。慾望からきた食卓でなく缶詰を消耗するための食卓である。

野菜にしろ魚類にしろ、とりたてを生まのままで食べるのが一番おいしい、わざわざとれる現地におもむき生まの風味を求めても今では殆んどわれわれの口にははいらぬ、収穫の全部を協同組合が収荷してゆくからだ。

## 衣服の今昔

衣服についても明治新政前までは、侍、町人、農民はそれぞれ着装がちがっていた。さらに町人でも旦那、番頭、丁稚では衣装が異なり、婦人でも奥方、内儀、乳母、下女では区別があり職業婦人でも料亭の女将、女中、芸者、女郎など、いずれも一見してその職場が識別できた。

それが戦後現在では男女ともに特定の職服は別として殆ど「洋服」の一色にかわった。

ここで今さら昔時の封建制下の職階による服装がよいと説くものではない。むしろいいたいのは一般庶民社会で町人は町人らしい慣習の衣服の様式のなかで、つまり限られた制約の範囲のうちで、いかに自己の個性を主張し、いかに趣好の進展を意図したかということである。

江戸時代の化政期の庶民の生活を読売新聞社発行「日本の歴史」9巻 179頁には次のように述べている。

「江戸では、庶民が人目につくような風体に仕立て花やかにし、身分不相応に美しくすることは御法度であった、諸事儉約の禁令がしばしば出され、市民は衣服をはじめゲタや日がさくし、かんざしの類まで干渉されがちであった。そこで、たとえ、見た目にはなやかさがなくても、なりかたちは小さくても、そこに精巧な技巧がほどこされ、洗練されたよきがある「渋み」と「こる」ことをとうとぶ江戸趣味が生れてきた。(中略)

やがて化政時代を迎えると、新しいタイプとして「いき」とか「すい」といわれる特色が目立つようになった。これはごてごてしたおごりを示すのでなく、さっぱりとあかぬけていて、しかも、色気をたたえた、すがたをよしとしたものである。

濃い化粧でかざり立てるよりも自然のところを多くみせて、そこに異性をひきつけるものがあつた。これはおごりではないから、通人よりも庶民で多少の遊びになれたものであれば可能性のあるいきかただつた。一にも二にも儉約をすすめられるきびしい統制下にあつては、そういうふうな、おもてを簡素に、じつは裏には金もかかっているというのが、民衆のひそかに理想としたところだったのである。」

これでもわかるように、「渋い」とか「こる」という言葉で現わしている一見ごく平凡な衣服が仔細に視るとその人の深い趣味性がうかがわれ、その襟、着物、帯、紐、八掛の取り合わせにこり、衣装全体が惚ればれと調和して素材は高価でなくとも全体に豊かな気品をかもし出すのが好みであつた。従つてこれらの一品一品の選択には並々ならぬ配慮が払われたものであ

る。なおことわるまでもなく右の引例でわかるように、女性だけではなく男性までが衣服にこのような自己の趣好をこったのである。

われわれの知る大正時代でも、例えば百貨店が客の趣好に先行して流行をつくるため新柄とか新図案をつくって展示したものだが、われわ庶民の家庭でも、なお特に心をいれる晴着には百貨店のマネキンものに満足せず、図柄、染色を見立て、わざわざ京都の専門店で注文したり、丸帯など西陣の織屋を訪ねて織らせたりしたことを記憶する。1本の帯を求めるに2、3年もあれか、これかと思案し、工夫をこらした。

自己の慾望の充分なる発揚が見られたものだ。

今われわれ（男性）が服を一着新調するに、2年も3年も思案する人があろうか、考えるとすれば財布の計算であって、スタイルや色目、柄ゆき、生地を選択に2、3年もかかってその趣好を育てる人が何人あろうか？

大抵の人は自分がほしいと思わぬ先に注文取りにたかられる。「もう形がくずれましたヨ、一着おつくりなさい」と強引にすすめられ、いや応なしに作らせられるのが一般である。作る思惟に先だちサンプルを押し付けられ、うっかり見ているうちに、生地がきまり「お金は月賦で結構です」といわれて寸法をとられ、半月の後には製品が届く。

便利といえば便利である、しかし慾望の3過程が完全に踏まれているだろうか。

三つの過程のどれかが省略されているのがわかる。

## 現代の住居

われわれは戦災で最低生活に落ちた。住居においても家畜の小屋にも劣る生活に甘じた。家畜の小屋にしる独占できる場所のあるのはいい方で住むに家なき世帯が国民の半ばを越えて、6畳に幾世帯かが雑居する貧困下にあった。国家は住宅の建設に毎年多額の国費を投じて、先ず各世帯に独立の一室を与えることを国策とした。

その結果はいわゆる住宅難と称するものの幾分の解決にはなりつつあるが、人間は蜂の巣穴に生存する蜂族に似たアパート・ビルに集団雑居することとなった。

人間には珍奇を好む習性があった、このビル住いにひきつけられた。なかには金をうんと持っている階層でいながらこの住いに慣れるものもでた。こういう人種に対しては同じビルでも外観以上に内装にウンと金をかけ、そうしてまたウンと金をとる「マンション」が発生した。現在このマンションを始め、建て売り住宅、貸アパート各種各様の住宅が氾濫している。この建物に共通していえることは、いずれも「文化住宅」と呼ばれる特色をもつことであり、これらを眺めると文化とは安値、簡素、没趣味をいうかと思わせる。特に指摘したいのは必要な最小スペースだけで、全くゆとりというものがないことである。なるほど無駄のないことは経済的で近代人の好みに合致するところではあるが、特に住いにおいては、住むものの工夫によってさらに空間を個人の必要な用途に活用したいものである。それが住むものの趣好を潤わせ使

うのに妙味を起すものなのだがそれが全然考えられていない。

住居を欲求してもいえることは、やすやすと欲望がみたされることである。住宅難は遠き昔のこのように、求めに応じ勞せずして希望に近い対象を斡旋してくれる不動産屋が企業（サービス業）として成立したことだ。全国都市やその周辺にはその数がもの凄い勢いでふえ、職業別電話帳を繰りひろげると驚くなかれ食堂、飲食店の数よりはるかに上廻っている。この不動産屋が電話1本で飛んで来て、求めるものの希望条件をきき、希望を要約して2、3の候補を速座に持ってきてくれる。しかしその条件が完全に満足することは滅多にない、というのは、どこか気に入らぬところがあっても、その不動産屋が言葉巧みに口説き落とし、依頼者は自己本来の欲望の何パーセントかを譲歩して、好まざる対象であるも、己の欲望をあきらめて商談を成立させられるからである。

### 機械文明による欲望のしわよせ

衣食住の生活に見た身近かな、ほんの2、3の例で知るように、今日われわれの生活は、欲望の思惟として浮ぶ以前に、周囲からの据膳で満足される仕組みになっている。いかにも便利かつ家政の能率化となつて、人間が嫌う労働が極力はふかれて「最少労働をもって最大の効果」を日常生活の上にもたらしているかに見える。

企業の合理化やさらに大企業化によって各企業が、互にサービスを競い人はそのはてしないサービスを甘受し、自己の欲望に先だち満足を享受しているかに見える。生活の手段は国によって用意され能率化された家庭は、より多くの余暇を持つにいたって、遙かに文化的な生活を営むことになったとされている。

しかしはたしてそうであろうか。生活の合理化、能率化の半面にそれは、欲望に多くの規制をうけ、自己の欲望に添わない満足を与えられ、いわゆる人間は生活をも機械化されていないか。



その原因はどこからきているのだろうか。

いうまでもなく機械文明、物質文明の影響を受ける、日本の政治、経済のつながりからきているのである。さきに指摘したように、住宅は画一的なビルの蜂穴に集団起居し、衣服も食物も業者の選んだ大量生産の所産にかかる企画、既成の素材加工に依存している。そうしてこのつくられた資材の消費を、その欲望の思惟のいかんにかかわらず、好むと好まざるにかかわらず消費するよう運命づけられている。

そうした原因についてももう少しほりさげて先ず経済の現実に見よう。即ち戦後日本の経済は高度に成長した。産業の合理化、設備投資の拡大によって、生産は増大した。元來人の欲望に応じて生産される筈の物資は、今や欲望以前にこれを見越して過大生産がなされた。積年にわたる経済的上昇によって市場には物資は蓄積された。これを使わねばならぬ。欲望をみたと

いうより、この物資を消化することに比重がかけられている。

従って欲しいから食べるのでなく、物があるから食えというのであって、恰も慾望の判断の未熟な幼児に対するように、組織体がこれを指図するのである。

政治の面からも原因が指摘できる。

日本はようやく自由経済になったというが、自由になったのは、主として生産や貿易の一面であって、消費部門においてはあいかわらず企画、統制の規制下にある。しかも主婦は家庭に直結する物価については、やかましくいうが、消費物資の流通や、慾望の規制については知ろうともせず、また物価高騰についての責任の一半が自己の側にあることをあまり考えない。

慾望を満たす素材は個人が用意し組成するのでなく、国がその責任においてなされるのが当然とされている。住居にしても、住むにところがないと政府を厳しく責め、食糧にしても主食米が欠乏すればその配給を強要する、趣好選択の工夫によって、麦を加工しよりよい主食に仕立てることも献立の工夫であろうが、これを政治家が「麦を食え」というとその政治的手腕を批判する。木造家屋に住み慣れた国民に蜂穴ビルを供給しても大して不満をいわなかった同じ国民が、麦食には強い反撥が起るのである。慾望を規制する点では二者いずれも同じであるのに、米の主食としての位置だけは依然慣習からぬけきらない、消費経済の全般を政治に依存しているながら、個々の慾望の達成を強いる、ちっと身勝手な発言である。

消費生活が政治によりかかりすぎていることは、当然の結果として前述のように個々の慾望は軽視される傾向になる。政策は常に最大多数を目標におく、画一的全体的になって、個別、変化は無視されやすい。

### 個人の欲望を育ててゆきたい

このように日常生活は国の政治や経済に大きく作用されている。これは当然なことである。

ただ現在の日本は、経済の成長が急速度に進んだ割合に、個人の慾望に対する自覚がその進展に乗り遅れてしまった。もっと慾望に自主性を持ち、もっと独自に達成の道を開拓することが肝要である。

筆者はこの文のはじめに、おしつけれた慾望とか、据膳とかと慾望を表現したが、以上述べたことでわかるように、一面それは自己の努力不足が原因をなし、自主性の欠如を内省しなければならない。

消費生活においても、いうなれば何もかも政治に依存する他人まかせの慣習を改めて、自力独歩の道を工夫すべきだ。国がやることは「等しき分配」であって、それを裏をかえせば今できる施策の最低線をやっているのである。勿論これに満足すべきでなく、むしろ個人はその能力に応じ、能力あるもの程その特異の個性を発揚して、この最低線を突破し素晴らしい慾望を人それぞれに満してゆくべきである。この点が現代は忘れられている。

住宅にしても政府や、その助成金をあてにしているかぎり画一的なビルに甘んずる外はない

それが個々の慾望をみたすにたらぬとわかったら、自己の発見と創造で、特趣性を生み出すに努めなければならぬ。

ビル建築には清潔、耐久、防火、耐震、土地の高度利用などの長所がある、この点で国が行なう建設にビル様式を採っているのは当然の傾向といえる。しかしこれに満足することなく個人のさらに有能の慾望は、この上の新しい研究と、日本古来の伝統の智恵を探って、いうならば風土や国民性を十分に基礎としたより優秀な近代建築をつくりたい。

今一ついいたいことは、慾望をもつと大切にしたいということだ。慾望はもっと高い知性を具有するものにそだてねばならぬ、慾望の選択にも創意、工夫を重ね、慾望の実行には熱心に努力をそそぎたい。

家庭はテレビや冷蔵庫、電気洗濯機の入手によって、主婦の労働ははぶけて大いに余暇がえられたといわれる。さてその余暇がどのように活用されたか、慾望をたえず知性的に錬磨していかないと折角できた余暇をかえって無駄に消費してしまう。

最後に調理について一言つけ加えておきたい、洗濯や掃除は、いかにも主婦の負担であろうそれは労働といえよう、合理化、能率化をはかって労働時間をへらすことに異論はないが、調理までをひとりで委ね画一不変の食事をあてがわれることには賛成できない。夕食の食卓だけは家庭で一家団らんのうちに親睦和合する一ばん楽しいひとときである。それだけにそれは工夫や創意をもって主婦の心あたたまる創作でありたい、それをつくることが主婦の楽しみであるよう希望する。



幸福を求める人間像は慾望を充足する過程から考察される。

幸福はややもすると環境の影響を受けやすく、それが創意によってもたらされるものであるか否かは疑わしい。

幸福は衣食住の見地より解明されるものであるが、更には政治、経済に左右されるものであるがゆえに真の幸福は努力と創意によって獲得されねばならない。

The real appreciation of the personality of a man looking for happiness must be found in his endeavor to satisfy his desires. Comforts of life, on the other hand, have much to do with his given environments and the positive value of his creativeness in making him happy is often placed in an unfavorable light.

His happiness presupposes contentment in food, clothing and housing, which are under the control of the political and economical factors. His true happiness, therefore, must be pursued by making efforts and exercising his originality for the attainment of the further betterment of life.